九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

第2回九州地区国立大学間合宿共同授業報告書

https://doi.org/10.15017/21133

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 2, 1977-10-31. 九州大学教養部
バージョン：
権利関係：

1. 第二回九州地区国立大学間合宿共同授業実施要項ならびに日程表

1. 目　　的　九州地区国立大学の学生と教官が一堂に集まり、寝食をともにしながら研修することによって、学生と教官並びに大学間の交流を深め、かつ、同一テーマについて多面的に授業をすすめることを目的とする。
2. メインテーマ　「現代の人と自然」
3. 主　　管　九州大学教養部
4. 会　　場　九州地区国立大学九重共同研修所
   大分県玖珠郡九重町筋湯〒879－48（電話　飯田高原局　097379－2617）
5. 開催期日　昭和52年7月11日(月)～15日(金)の4泊5日間
6. 参加資格　佐賀大学教養部、長崎大学教養部、熊本大学教養部、鹿児島大学教養部、琉球大学教養部、九州大学教養部に在籍する学生
7. 参加人員　108名(佐賀大学16名、長崎大学16名、熊本大学16名、鹿児島大学16名、琉球大学18名、九州大学26名)
8. 日　　程　別紙日程表のとおり
9. 講師と講義題目

(1)「社会的風土と人間」	九州大学教授	安藤延男
(2)「人間と自然」	琉球大学教授	木崎甲子郎
(3)「ヘーゲルとマルクスにおける自然と人間」	佐賀大学助教授	東城国裕
(4)「環境制御の地理学」	熊本大学教授	山口守人
(5)「九州人物史とその背景」	九州大学教授	秀村選三
(6)「植生と環境」	長崎大学教授	伊藤秀三
(7)「生態系の働きと人間生活」	鹿児島大学教授	田川日出夫
(8)「天然物化学について」　―昆虫フエロモン及び植物成分の構造決定―	琉球大学教授	森　巌
(9)「九州の自然」（野外講義）		
地学関係	九州大学助教授	林　正雄
動物学関係	同　助教授	中西明徳
植物学関係	同　教授	稲田朝次

10．参　加　申　込

(1)　参加希望者は、当該大学教養部担当係へ参加費を添えて申し込むこと。

ただし、既納の参加費は理由の如何を問わず払い戻しをしない。

(2)　当該大学は、参加者の名簿を6月20日までに九州大学教養部あてに送付すること。ただし、参加費は7月11日（第1日目）に研修所において払い込むこと。

11．参加費（食費のみ）

3,400円（7月11日夕食から7月15日昼食まで）

12．単位の認定

当該大学の授業の一部と見なし、各大学の判断において、単位を認定する。

ただし認定することのできる単位数は2単位までとする。

13．そ　の　他

(1)　持参品　筆記用具、ノート、洗面具、着換え類、パジャマ、運動靴、雨具、水筒、ジーパン（女子）など。

(2)　集　合　参加者は、各大学毎にまとまって7月11日（月）午後5時までに九州地区国立大学九重共同研修所に集合すること。

(3)　解　散　7月15日（金）午後1時現地で解散するが、参加者は各大学のバスで輸送する。

メインテーマ「現代の人と自然」　　第 2 回 共 同 授 業

時 / 日	7	8	9	10	11	12	13	14	15
7月11日(月)							車中オリエンテーショ		
7月12日(火)	起床	朝食	講義「人間と自然」琉大 木崎教官	休憩	講義「ヘーゲルとマルクスにおける自然と人間」佐大 東城教官	昼食	講義「環境制御の地理学」(1) 熊大 山口教官	休憩	
7月13日(水)	起床	朝食	講義「植生と環境」(1) 長大 伊藤教官	休憩	講義 同 (2) 同	昼食	講義「生態系の働きと人間生活」(1) 鹿大 田川教官	休憩	
7月14日(木)	起床	朝食	野外講義「九州の自然」(地学系) 九大 林 教官			昼食	同	休憩	
			〃 (動物学系) 九大 中西教官				同		
			〃 (植物学系) 九大 稲田教官				同		
7月15日(金)	起床	朝食	全体討議	休憩	同	昼食 (反省茶話会)	解散		

注）講義・スライドは大研修室で行う

日　程　表

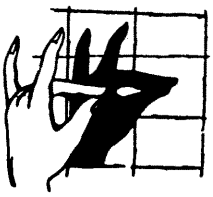
昭和52年度

15	16	17	18	19	20	21	22	23
車中オリエンテーション		受付 自由時間 担当教官打合会	オリエンテーション	交歓夕食会		講義「社会的風土と人間」 九大 安藤教官	自由時間	消灯就寝
休憩	講義(2) 同 同	自由時間 担当教官打合会	夕食	講義「九州人物史とその背景」 九大 秀村教官		講義についての自由討議	自由時間	消灯就寝
休憩	講義(2) 同 同	自由時間 担当教官打合会	夕食	講義「天然物化学について」 —昆虫フエロモン及び植物成分の構造決定— 琉大 森教官		講義についての自由討議	自由時間	消灯就寝
休憩	グループ別討議	自由時間	夕食	懇親会・教職員学生の懇談の夕べ			自由時間	消灯就寝

第二回九州地区国立大学間合宿共同授業参加者数

大学名	講師	事務官	学生			合計
			男子	女子	計	
九州大学	6	4	17	5	22	32
佐賀大学	1	1	6	8	14	16
長崎大学	1	1	8	0	8	10
熊本大学	2	0	8	3	11	13
鹿児島大学	1	1	13	1	14	16
琉球大学	2	1	9	6	15	18
計	13	8	61	23	84	105

注）ほかに7月13日は武谷九州大学長と緒方道彦九大教授が出席。



2. 第二回共同授業の実施状況（要旨）

(1) 講　　義

① 社会的風土と人間

安　藤　延　男（九州大学）

この講義の主な目的は、今次の合宿共同授業期間中に何度か行われるはずのグループ討議を有効に進めるための簡便な技法について、参加者全員に体験させ学習させることにある。従って本質的には、今回のメインテーマたる「現代の人と自然」とこの講義とは、関連性の乏しいものであることはやむを得ない。

まず「社会的風土（ソーシャル・クライメイト）」の概念を述べ、次いで「社会的風土」とリーダーシップとの関係に関する研究資料を紹介した。用いられた資料は、アメリカの社会心理学者リピットとホワイトの二人が、レヴィンの指導下で1940年代に行った画期的なリーダーシップ研究から抽出したものである。彼らによれば、「民主的リーダー」のもとでは、「権威主義的リーダー」や「自由放任型リーダー」のもとにおけるよりも、集団メンバー間に強固な仲間意識や協力的風土が形成され、集団の課題に対する動機づけ（やる気）も高いことが報告されている。従って今回のような合宿共同授業やそのなかで実施されるグループの運営も、リピットらの言う「民主的リーダーシップ」が適合していることを確認し、そうしたグループ運営法の一つとして、「バズ集会法」をとりあげることにした。

全参加者を6～7名づつの小グループに分け、講義者自身が総合司会者の役割を実演しつつ、(1) 小グループでのバズ集会、(2) バズ集会の内容の全体への報告と問題点の整理、(3) 再びバズ集会、(4) 全体への報告……と、この討議法の過程を体験させつつ、随時、解説を加えるなどして講義を進めた。

最後に、この講義への質問を各小グループ単位で出してもらい、講義者が回答して授業を終了した。なお参加者には、民主教育協会発行のパンフレット「討議の手びき」が配布された。

② 人　間　と　自　然

木　崎　甲子郎（琉球大学）

「かけがえのない地球」という言葉をスローガンに、1972年ストックホルムで行われた第1回国連人間環境会議では、「人間環境宣言」を一致して採択した。そこには限られた環境と有限の資源しか

もたぬ地球上で、人間が社会集団として、あるいは個人として自由に生きぬくためには、地球をどのように管理運営していくべきかがのべられている。

現代の人類はすでに、地球を管理しなければ生存ができなくなるであろうという予測をしはじめている。歴史的にみて、人間は自然を利用し、自然に働きかけてその生活の繁栄をはかってきた。それが労働であり、生産活動である。しかし、近代産業資本の急激な膨張は自然破壊と公害をまきちらすようになった。

人間が自然と対応して生産活動を行っているいくつかの例をスライドで説明しよう。大森林を焼き払って牧場を作るパタゴニアの住民、天を仰ぐような山の斜面に米を作るヒマラヤの山岳部族の生活、ステップにまで牧場を拡大して、そこを砂漠にしてしまったオーストラリアの牧畜業者、自然を完全に管理しているスイス、自然と共存してきた沖縄の離島住民の生活。これらのなかから人間と自然との複雑で微妙なかかわりを読みとることができる。

人類の歴史をふりかえってみても、自然の変革（破壊）は程度の差はあれ、まぬがれえない。これを否定したら人間の存立はありえない。問題は誰の立場でこれを行うかということである。世界の人口は爆発的に増加し、化石燃料を中心とするエネルギー資源の枯渇も目前にあるとき、もいちど、人類の歴史的経験、たとえば放浪採集生活から定着農耕生活への革命的変革、をふりかえって学びとる必要がある。

③　ヘーゲルとマルクス（主義）に於ける自然と人間

東　城　国　裕（佐賀大学）

(1)　ヘーゲル

ヘーゲルに於ては、自然は理念の自己疎外態であり、理念が自己復帰して精神となる過渡的段階に位置ずけられている。即ち、精神は概念の自己運動として自然の諸形態を段階を追って展開し、最后に自然を離脱して精神となる。この自然の諸形態をヘーゲルは、ａ、力学的自然、ｂ、物理学的自然、ｃ、有機的自然に区別し、更に、有機的自然を、イ、地質的有機体、ロ、植物的有機体、ハ、動物的有機体へと区別する。そして、これらの段階を追って、主観性、生命性が発展する。そして、最后の動物的有機体において、生命の過程的無限性が成立していると見る。環境的自然を自己の中に統一してゆくこの過程にヘーゲルは主観性を見るのであるが、これは動物の種属としての生命であり、《純なる自我》と云われる。そしてこの種属的生命を個々の生命自体が意識するに至ると、自己意識、即ち人間的生命の段階である。かくて、非有機的自然を生命から分離し消耗するだけの動物的有機体の段階から、即ち自然から、自己意識、人間、精神が離脱を完成する。

?) マルクス（主義）

以上の如きヘーゲルの自然人間観に対して、マルクスでは、人間は人間的自然として《自然の一部分》であり、人間の肉体でない限りでの自然は《人間の非有機的身体》であって、人間と自然との（肉体的及び精神的）関係は、《自然の自己自身との関係》の一つのあり方である。そして、ここには自然が主体的に自己展開するもの、歴史的なものであることの把握がある。そして、この自然史の展開は、三つの発展段階を有っている。

a、無機的自然（天体史的段階）、b、有機的自然（生物史的段階）c、人間的自然（社会史的段階）。そして、この最后の社会史的段階とは、《生命活動》そのものである動物とは異り、《意識的生命活動》として、人間が自己の生命活動を意識の対象とし、それを種属的、社会的生命の無限性へと止揚することを意味する。即ち、意識的生命活動＝自己の非有機的身体としての自然の加工＝自然を人間的自然へ再生産すること、即ち労働。そして、このことを介しての自然的人間の人間的人間、即ち、社会的人間への自己変革の過程が社会史的段階に外ならない。これは三段階に区別される。即ち、イ、無階級社会（共同所有、人間と社会の自然への埋没）、ロ、階級社会（私的所有、精神労働と肉体労働の分離等分業の発生、自然と人間の分離）、ハ、高次の無階級社会（共同所有の復活、人間と自然の再統一）。そしてこの最后の段階に於て、人間を介した自然の自己認識として、貫徹した自然主義＝人間主義、貫徹した人間主義＝自然主義に、即ち、人間と人間の、人間と自然の格闘の、総じて歴史の謎の真実の解決に達する、とされる。

参考文献

ヘーゲル　①エンチクロペディ、②精神現象学、③歴史哲学

マルクス
エンゲルス　①経哲手稿、②自然弁証法、③資本論第一巻

本多　修郎　ヘーゲルと自然弁証法

梯　　秀明　物質の哲学的概念

芝田　進午　人間性と人格の理論、講座マルクス主義哲学

④ 環境制御の地理学

山　口　守　人（熊本大学）

諸君は、科学というものをどのように考えていますか。もし、科学を「自然の秘密を明らかにし、その内にある真理を把握するものである」と考えているとしたら、私は、「それは古い!!」とあえて

叫びたい。なぜならば、科学には外的目標はなく、人間が何を知りたいかということから出発すべきであると考えるからである。矛盾に満ちた現代社会においては、今や、科学は、社会現象として把握されなければならないであろう。

このような観点から、私が、平素親しんでいる地理学の中で、今次共同授業の主題（現代の人と自然）に関連あるものとして強いて論題設定したのが、「環境制御の地理学」である。諸君が高等学校までに経験してきた「地理」は、「地域の性格や他の地域との相違」を詳しく記述した分類目録であったといえよう。記述というものは、たとえ分類が加わったとしても、決して現象の世界的な分布のあり方を説明するものではない。現象を説明するには、それが法則の1例であることを確認する手段をいつも必要としてきた。このように考えたとき、諸君の学習してきた「地理」には、一般性の不足、なかでも社会的・経済的・政治的ビヘイビアーの空間的・生態的側面からの関連解明の不足がめだっている。

現代社会に現われた大きな問題である資源問題、都市問題、自然災害問題、食糧問題などに対して地理学が積極的に参加して行くためには、19世紀的な地理学が強く拒否してきた分析的手法、つまり法則定立的手法を導入しなければならない。このためには、人間行動を媒介にした環境分析、社会の空間構造分析が前面に押し出される必要があり、経済学・社会学・心理学・生物学などとの学際的協力が不可欠なものとなってきた。

下記の五つの小見出しは、地理学の「環境」に対する考え方の変化の背景を表わしている（配布プリント6枚の構成項目に同じ）。

1．自然と全世界の記述者としての地理学

2．自然と人間集団との対応関係

（適応～改変・破壊～制御）

3．環境改変・破壊のいくつかの事例

4．「無限の自然」から「有限の自然」へ

5．環境制御の手段への道

－環境アセスメントとは－

現代における人と自然との関係は、「ヒト」という「種(Species)」を破壊に導びく過程と再生に導びく過程との間における極めて不安定な均衡関係として把握される。このことは、客観的にみれば、その構成諸要素の一つにでも変化が生ずれば直ちに連鎖反応を引き起すほど極めて感度の高い体系を意味する。現代の人と自然との関係は、このような極めて感度の高い体系として理解されなければならない。「人間集団が全体として生きつづけることが望ましい」という公理が存在する限り、この極めて感度の高い体系を安定したものにすることが現代人に課せられた責務であろう。このためにこそ

科学は存在するのではなかろうか!?

本講義は、十分に熟成されていない主張を口述のみで行なったため、とまどわれたことと思います。理解をより深めたいと思う諸君は，下記の文献（入手しやすい文庫本の主なもののみ）を参考にされ、十分なる理解への突破口として下さい。

織　田　武　雄　地図の歴史　講談社文庫

都　留　重　人　世界の公害地図(上下)岩波新書

ピェール・ジョルジュ　環境破壊　クゼイジュ文庫

島　津　康　男　環境アセスメント　NHKブックス

⑤　九州人物史とその背景

秀　村　選　三（九州大学）

人物史というと歴史上の著名な人物の列伝になりやすいが、この講義では九州の風土とその中で生き抜いてきた民衆の歴史の特質を二、三考えてみることにした。学生がすべて九州出身というわけではないが、九州出身が大部分と思われるので、九州人気質を歴史的に省察するのも無駄ではあるまいと思ったからである。

九州は古来対外交渉の接点にあり`民衆は開放的で進歩的であったが、反面日本の辺境地帯で、停滞的であり保守的であるという矛盾したものをミックスさせていた。兵農の分離が徹底しないまま、武士の国で尚武の気象は中央に対して反逆と挫折の道を屢たどった。センスは鋭く、ヴァイタリティーに溢れているが、ねばり強く文化を育てることが乏しかったことが反省される。

九州各地の農山漁村や各藩の史料探訪の過程から、言わば足で歩き、肌で感じとったもの、そして老人から聞いた知恵を学生に語り、学問が単に教室での講義や読書だけではないこと、体をもって体得する道もあることを語ろうとした。

⑥　植生と環境

伊　藤　秀　三（長崎大学）

植生とは、多種類の植物が作りあげる生活集団である。それは大地がまとう緑の衣装ともいわれる。植生学の研究対象であると同時に、植生はわれら人間の生活環境の一要素でもある。講義の主目的は、場所により条件により様々な姿をみせる植生を、科学的に正しく“読む”ことにおいた。

人間が干渉する以前の植生は、そこの自然条件に適応した植物からなり、その風土に適応した相観

を有していた。この「原植生」は，人間の干渉の有無強弱に応じて姿を変えて現在に至っている。「現存植生」のうち、人為によって基本的な組成と構造が変えられていないものは、自然群落といわれる。それは、神社林や天然記念物などの保護区に、僅かに残っているにすぎない。しかしそれを通してのみ、現在、農耕地や市街地となっている場所の原植生を知ることができる。

人間は生活の資源を得るために、自然に働きかけ、それを改案してきた。その結果、人間の干渉のもとでのみ、自然群落に代って発達する諸種の代償（二次）群落が生み出された。暖温帯の照葉樹林域に例をとると、シイ・カシ等照葉樹萌芽林やアカマツ林、ススキやシバの草原は、すべて自然植生であるシイ林に置換って、人為のもとでのみ発達してきた代償群落である。九重地方の草原もまた、植生学の概念上は、自然群落ではなく代償群落である。現在、人間環境の一要素をなす植生は、ほとんどが人間の干渉下の代償群落からなっている。

では、自然群落が代償群落に変えられて行ったのは、人間の歴史のいつの時期からであろうか。これの解答は、花粉分析学から提出された。

花粉は腐りにくい殻を有している。しかも殻の模様は種属に特徴的である。湖底の堆積物の中には、花粉がふくまれている。堆積物の下部・中部・上部にふくまれている花粉を調べることによって、それぞれの時期の植生の概要を知ることができる。日本各地の花粉分析の結果は、縄紋時代の末期から弥生時代にかけてシイの花粉が減少し、マツの花粉の増加を明らかにしている。このことは、自然群落であるシイ林が破壊されて二次群落であるアカマツ林の発達を物語る。しかも、中国大陸の原産であるソバの花粉が、この時期から出現する。これは栽培植物（ソバ）と農耕文化の伝播を物語る。農耕の拡大と自然植生の変革は、花粉分析の結果の植生学的解釈から明らかである。

人間は植物から生活の糧を得ると同時に、植生に干渉してきた。文化と技術の水準に応じて、自然植生域は狭められ代償植生域が拡大してきた。そうした植生が、現在の人間環境の一部をなしている。

⑦　生態系と人間の生活

田　川　日出夫（鹿児島大学）

I　生態系の構造と機能

生物は単独、或いは単一の種のみでの生活は不可能で、集団を作り、相互に依存しながら生活をしている。生活の場が生態系と呼ばれ、環境によって生物の生産活動（生活）が規定されている。生態系には生産者、消費者、分解者の三役が必ず揃っていなければならない。(1)生産　緑色植物による生産活動にまつわる問題として、ソ連タイガ地帯のアラス地形、熱帯での林業の問題、海洋の生産を上げるための方策等について解説した。(2)消費　非緑色植物の一部、動物は生産者又はその

生産物を摂食し、一部は呼吸で消費するので消費者と呼ばれ、消費者の作る食物連鎖は有害物質を濃縮するという一面、各ニッチェでの成長効率（成長量／摂食量）を考慮に入れると、肉食より菜食の方が多くの人間を養えるという一面について、ハマチの養殖などを例にとって解説した。(3)分解　すべての生物は死ぬと細菌、菌類、や微小動物によって分解されてCO_2に戻る。有限の物質を無限に利用するにはこのrecycling を真似する以外にない。

II　生態系構成員の豊富さ

いろいろなシビアな条件（乾燥、過剰水、砂の移動、流水、塩水）に侵入する特定の植物群は長い年月を経て、極相林へと生態系を導く。植物を豊富にすると共に動物をも豊富にする。遷移は生物の種類を豊かにする手段であるし、生態系回復の手段でもある。自然界では乾燥するにつれて、高緯度に行くにつれて、生態系の構成は貧弱になる。しかし人手が入ると貧弱化は増々ひどくなり、バラエティは少なく、逆に同じ種類が多くなる。そうなると畑地や造林地でも見られるように害虫雑草がどんどんふえ、自然は単独の種のみの生存を許さない。クロマツの被害などを例にとり、防除法についても概述した。

III　生態系の人類生活への機能

森林の空気を清浄化する働き、土壌の保水能力などについていくらかのデータを示し、森林の重要性、林床の落葉の重要性について学生諸子の注意を喚起した。

⑧　天然物化学について――昆虫フェロモンおよび植物成分の構造決定――

森　　巖（琉球大学）

天然物有機化学を研究するにあたって、どのような手法がとられるかということを動物を対象とする分野では、昆虫の微量成分フェロモンを例とし、植物を対象とする分野では、私の研究室でイリオモテクマタケラン（Alpinia flabellata Ridl）から単離されたAlflabeneの化学構造をどのようにして決定したかを化学的手段、物理的測定結果を示して説明した。

〔A〕　昆虫フェロモン

有機化学の飛躍的な進歩によって、従来その取扱いが困難とされていた昆虫の微量成分を単離し、その化学構造を決定することができるようになり、昆虫の行動が化学物質によって制御されていることがつぎつぎ明らかにされた。昆虫の行動を制御する物質＝フェロモンを定義し、それらが、放出効果フェロモンと引きがね効果フェロモンに分類されること、フェロモンの抽出法を述べ、分類にしたがって性フェロモン、警報フェロモン、道しるべフェロモン、階級分化フェロモンについて、代表的

な昆虫から抽出され、構造の判明した化学物質について紹介した。

〔B〕　植物成分 Alflabene について

植物は生態系の一員として動物などと互に関係を保ちながら生活している。昆虫との関係をとりあげてみると、植物が自らの利益のために昆虫を誘引することもあるだろうし、逆に昆虫からの被害を阻止するために、段虫効果の成分を含有することもある。植物は、その生体中に生長に関与する成分だけでなく、他の植物、昆虫、微生物、高等動物などに影響を与える2次的成分を含んでいる。このような成分を生理活性物質と稱している。ここでは、西表島に産するイリオモテクマタケラン（ショウガ科の多年草）の根から分離された無色針状結晶（mp133～134℃）$C_{26}H_{32}O_6$ なるAlflabene の構造を決定するのに赤外吸収スペクトル、核磁気共鳴吸収スペクトル、質量スペクトル、紫外吸収スペクトルなどの物理的測定データがどのように利用されたかを概説し、本来の化学的手段が構造決定に如何に重要な役割をもっているかを強調した。

(2)　野外講義（第4日目）

野外講義は、午前中三教官により、全員を対象とした授業が行われ、そのあと、三班に分れ、雨あいを見て午後の時間を野外に出ることにした。地質学系グループは、研修所周辺の地質構造などを探索し、最後は地熱発電所を訪れて模型による解説を聴いた。動物学系グループと植物学系グループは合同して一目山（標高 1,287m）から湧蓋山（1,500m）にかけての調査に出向いたが、途中鞍部のあたりで、梅雨末期の雷雨に遇い、全員ぬれねずみの状態となって下山した。しかし行程の前半は、雨が止んでいたので、かなりの実習ができた。ところでこの雷雨に遇ったことは、学生たちの感想文によれば、きわめてよい経験だったとの評価もある。以下に担当教官三人の講義要旨を掲げる。

（a）地学系：地熱開発と環境保存

林　　正　雄　（九州大学）

日頃若い学生達とほとんど接触する機会のない私にとって、この合宿共同授業は忘れかけていた青春を彷彿させてくれ、また、専門外の諸先生方の講義を聞くことによって、少なからず視野を広めることができた。関係者に感謝の意を表したい。

さて、私は野外講義の地学系を担当したのであるが、その詳細は省略して次の3点を強調したい。

(1) 純粋的な基礎研究はもちろん必要であるが、地熱開発というような具体的な目標をもって地質を研究すると、明確な問題点が浮彫りにされ、かえってその本質に近づき易くなることもある。例えば、同じ九重系の角閃石安山岩も、山体毎よりも活動時代によって正確に細分されなければ意味がない。また、地熱発電に不用な熱水を地下に還元する場合に、割れ目や節理の発達する地層が地質構造的に把握されていないと、地震・地すべりなどの人工災害を引き起す可能性がある。

(2) 地熱開発にかかわらず、あらゆる種類の資源の開発を行なえば、ある程度自然が破壊されるのは避けられない。それよりも、約1km²の八丁原地区から純国産の5万kWHの電力（石油に換算して年間22億円分）が半永久的に得られることに注目すべきである。開発による自然破壊を最小限度に止めることが、人間の英知ではなかろうか？また、美意識を持って建設された発電所は自然と調和可能である。

(3) 書物によって知識を得ることは重要であるが、経験によって実証されていないと無力である。例えば、輝石安山岩と角閃石安山岩とがあることを知っていても、実際に野外で両者を識別できるまでには、100個以上の試料を検討する必要がある。このことは、人文・社会系の知識にも適応できるのではなかろうか？

以上の意見に賛成・反対の方、また、地熱開発に関心のある方、生産研 336号に来室されることを歓迎いたします。

（b）動物学系：蝶相から見た九州の自然

中 西 明 徳 （九州大学）

九州の自然を動物の面から論じ野外実習を行なえとの要請であったが、たかだか九州位のちっぽけな島のファウナさえ特定の動物群を除いては殆どつかめていない現状では、総括的な話をすることは無理である。やむをえず最も良くその分布等が判明している蝶を材料に〝蝶相から見た九州の自然〟といった話をした。

日本の蝶相は次の7つの分布パターンを示す分布系統の種で構成されている。即ち1．シベリア型、2．ウスリー型、3．中華型、4．日本型、5．ヒマラヤ型、6．マレー型、7．汎熱帯型である。九州ではこれらが、15%、17%、23%、10%、12%、15%、8%の割合を示す。これは九州の①地理的条件、②地形条件、③地史、④環境要因、などの相互の影響により決定されたものであるが、この4つの項目別に九州の蝶相の解析を試みた。①に関しては日本の各緯度における上記分布系統の割合、②に関しては特に高山の欠除による影響、③については襲速紀要素および、九重・阿蘇地帯のみ九州

の中では特異に分布する数種の蝶の由来、等を話し、最後に④に関して植生に関連して常緑照葉樹林にのみ依存するゴイシツバメシジミの生活史をスライドを供覧して話を終った。

野外実習は悪天候のため昆虫の姿は殆ど見られず実習にならなかった。

(C) 植物学系：九重山地の植物

稲 田 朝 次 (九州大学)

九重山地の植物を知るのには、天ヶ池自然観察路を通るのが、もっとも簡便で、種類も豊富である。ついで、大船、黒嶽と足をのばせば典型的な温帯植生が見られる。しかし、根拠地を九州地区共同研修所におき、二桁にのぼる学生の実地観察指導となると、前記のコースは困難であり、一日で完了できるコースは限られてくる。そのような制約のなかで、なんとかこなせるコースとして考えたのは沓掛山、扇ヶ鼻、星生山を経るコースである。

沓掛山は 1,500米の標高で、山かげにはチクシシャクナゲ、ミヤマキリシマ、サラサドウダン、ベニドウダン、ヤクシマ木ツツジ、ウスノキなど、ツツジ科の植物の群集が見られ、尾根すじにはノリウツギ、ニシキウツギ、オニナナカマドなど、低地では見られない灌木が見られ、星生山麓にはコケモモの群生地が見られる。牧野 (' 11) によればここがコケモモの自然植生の南限地であるという。以上のような特色のあるコースも、当日の空模様から困難と判断し、断念せざるを得なかったので、予備のコースとして考えられていた、一目山(1,327米)、湧蓋山 (1,500米) のコースに変更した。

このコースでは研修所の出口のところに、崖ぶちがあり、その斜面に大体の植物はみな生えている。オミナメシ、オトコヘシ、シラヒゲソウ、シライトソウ、オカトラノオ、マツムシソウ、シモツケソウ、ナガボノワレモコウ、ワレモコウ、イブキトラノオ、アソノコギリソウなどが見られる。オミナメシなど何処でも見られるはずのものが、近来、意外に減って、このあたりまで来ないと見られなくなったのは、七草の一つとして、淋しいことである。

一目山の北斜面にはアソノコギリソウ、タカネコウリンギク、コシオガマ、シライトソウ、ギボウシなどが群生する。

湧蓋山頂にはマツムシソウの群生が見られ、美くしい景観であるが、途中、雷雨に見まわれ、中断せざるを得なくなったのは残念であった。

このコースで一目山登り口でイヨカズラを見たのは今回はじめての収獲である。

(3) 自由討議　(第2日目、第3日目)

これは第2日目と第3日目のいずれも夜に開かれたものである。その雰囲気を第3日目の夜のグループの報告を通じて紹介してみよう。なおここでは、7グループのうち、5グループだけにとどめる。

A 班

参加学生数　14人　教官　安藤　延男（九大）
篠塚　敏生（熊大）

各自、自己紹介をおこなったあと、九大生の司会の下に討議に入った。テーマは、お互いに出し合う中で次の2点が中心になった。

(1) 公害の問題、水俣病

(2) 沖縄問題

(1)は、患者救済のつもりで活動しているのだが、患者を利用しているのではないか、との声がでている、どうしたら良いか、との形で提起された。(2)は、琉球大学生とのやりとりの形で討議され、最後には自衛隊員の入学問題にまで発展した。この中で、沖縄の人々の戦争体験、さらには長崎の被爆体験は不体験の者には、なかなか理解できないものであるとの声もでた。

討議は活発であった。午後11時になっても終らなかったので、部屋を大研修室に移して、学生だけで続行された。11時すぎても討論は続けられていた。

B 班

木崎甲子郎（琉大）
中西　明徳（九大）

まず、学生側の司会者を中心にテーマをどうするか、との提案があり、〝人間関係〟について〟、〝男女交際のあり方〟、〝大学に何を残すべきか〟、〝大学で何をなすべきか〟などの案が出された。そのなかで、〝人間関係について〟を中心に話題がいろいろと出された。

友人とは、親友とは、などと、いってみればごくありふれた問題なのだが、何人かは深刻にかんがえているようだ。それが、学内生活のなかで、友人を作る機会がすくない、といううったえにつながっていく。つまり、クラスがきまっているのは、語学とくに英語だけで、他の科目は自由登録という大学が多いため、講義を受けるというふつうの学生生活のなかでは、よほどの機会に恵まれないかぎり、友人ができないようだ。

クラスをまとめてなにかしたいと行動する積極的な学生もいたが、それも集まる時間の制約や一般学生とのコミュニケーションの不足が障害となっている。ホームルームやリクリエーションルームを

要望する声もあった。

話は男女交際のあり方にうつっていったが、異性という問題を含みながら、話題の底辺に流れているものは、やはり、友人が欲しい、心をうちあけて話しあえる相手を求める心情であったといえよう。

入学してまだ月日のたっていない教養部の学生であることを考慮に入れても、時間がたてば解決するという問題であろうか。この年代の学生の考え悩んでいる事柄やそれに対する追求の仕方は、今も昔も変らない問題なのだ、というのがチューターとして話しを聞き終ったときの想いであった。

C 班

田川日出夫（鹿大）

学生の中からリーダーを一人選び、討論テーマを募ったが、良いテーマが出なかったので、リーダーの提案によって、〝いやなもの〟と〝よいもの〟などで始まった。それぞれに解釈が異なり、いやなものの中には、幼児期や少年期に経験した驚怖に基づく〝お化け〟〝落雷〟などから、鶏を殺す時に首を切り落す情景から来た鳥類一般への嫌悪感など感情的なものが第一類を占めた。第二類としては自分に対する嫌悪感、いゝ加減ですますことに対する反省としての完全さを自己に要求するといった類のより精神的なものであった。

〝よいもの〟、〝好きなもの〟の中で圧倒的に多かったのは、自分自身の、誰にも拘束されない時間、ボケーとしている時間が素晴らしいということであった。必要であることと望ましいことと取り違えているようであった。すきなものの中に女性と答えた男性がいた。これから女性観や男性観についての意見交換があった。一般に女性の方が醒めている眼を持っているようであった。男性諸氏の方がむしろロマンチストで女性の扱い方に困っているように感じた。家庭で父親、母親と女性問題、男性問題を心のおきなく話し合える家庭が必要なのではないか。

D 班

奥田　八二（九大）

食堂の一角を利用して十数人が集った。教官側からは武谷九大学長と私が参加し、琉球大生が司会した。文字どおりの自由討議で、テーマは設定されなかった。こんなとき、自己紹介からことは始まる。司会者が与えた糸口は各大学の特徴と思われる点を出し合おうということであった。

琉大や九大からはキャンパスがいかに狭いかという発言があった。とくに琉大からは教官定員、開講数の不十分さによって、必要単位をそろえていくのにいかに苦労させられているかにつき、受講登録制とからんで話題が投げかけられさ。

単位問題になると、専門課程と教養課程と縦割りと横割りの仕方の違いで各大学で取り方に共通点

がむしろ少ないことがわかってきた。また点がとりやすい先生、とりにくい先生について新学期のオリエンテーション時に学生側がくわしい資料を作ることがどの大学にも共通していること、定期試験の時にノートのコピーのみならず、「受験要領教えます」式の情報センターが自然発生的にできることも各大学で共通の現象であることが発見された。

話は生協問題、学生運動の問題に発展した。生協が学生生活に密接有意義な関係があることは認めつつも、その運営にかなり疑問が投げかけられた。さらに、学生運動が一部の学生によって極端に走り勝ちであるため、一般学生にはなじみ難いということが指摘された。これらの点では参加学生は多くの意見をもち、各大学の実情が出し合われ、思わず時間が経過し、午後11時にもなってしまって、学園生活についてまだ語り足りない気持で散会せざるをえなかった。

第1回共同授業のときと比較して、発言はなめらかに出た。学園生活の半ばを占める課外活動について、学生の多くは、訴えたい不満を山ほどもっている。それは、単位修得その他正課授業に関するよりもはるかに関心が高く不満も大きい。大学側の施設や予算の不十分さに起因するとはいえ、一般学生にとっては「学生運動」がこれを増幅しているらしくもある。

E 班

稲田　朝次（九大）

熊大、山口先生と私が参加した自由討議の学生グループは計13名で、その内訳は次のとおりである。琉大、3名。鹿大、2名。熊大、1名。九大、3名。佐大、2名。長大、2名。彼らの自己紹介による出身地は次のとおり、沖縄、2名。鹿児島、1名。福岡、2名。佐賀、3名。大分、2名。長崎、2名。福島、1名。このうち長崎県出身の2名は長大生、沖縄出身の2名と福島出身の1名は琉大生、大分出身の2名は鹿大生、佐大生は地元と福岡から。九大生3名は夫々、福岡、佐賀、鹿児島から。熊大生1名は福岡から、という分布になる。九州ブロック内では宮崎県の出身者が一人もなかった点がめだち、琉大に福岡県から行っているのがめだった。きくところによると海洋学科は琉大の特殊性ということである。

討論の内容は、二回目の集りではあったがまだ堅さがめだち、具体的な問題提起がなく、山口先生から、学問の学び方、専門の選び方などに関する格調の高い話題はでたが、それもそれなりに終り、学生からの質問もなく、低調であった。

長崎大の学生の提起した問題では特殊なもので、医学進学課程の一般教養科目をやめ、基礎科目と専門科目で六ヶ年にしたいという意見が医学部教授の間である、ということである。

それに関連して、さまざまな意見がでて、各大学の一般教育科目の授業への批判、不満のようなものがだされた。それらの批判、不満はいつでも聞かれるすじのもので、曰く高校の授業の焼き直しだ、

曰く、新鮮味に乏しい、という類のことである。反面、社会科学、哲学、などに目新らしい意欲を感じ、知識欲にかりたてられる、という陳腐なものであった。医学部の進学課程の問題は、近年、医学系の講座が沢山増設され、それに伴い、養成する医者が一体専門医をめざすのか、または従来どおりのオールラウンドな医者を養成するのか、未だにその全体像がきまらず、一応従来どおり全科をマスターした医者の養成をめざすところに問題があるところまでには討議は深まらなかった。

討論という名に値しない集りではあったが、それでもそれぞれが、一応、それなりに自分の発言をし、まとめようとしてゆくところに、一つの意義は認められた。

F　班

参加学生　12人　教官　林　正雄（九大）
森　巌（琉大）

おもいおもいに座を占めていたが、座席とりゲームの結果、大学、知人などの区別なく全く分離された指定席につく。特に司会者をおかず、自己紹介に始まり、討論の主題もないまま自由な話し合いに移った。当初、座り心地が悪いのか、話しもとぎれがちであったがしこりがとれるにつれにぎやかになり、予定の時間が過ぎても談論風発、終始和気あいあいたるものであった。

座談で論議された主な項目は次のようなものであった。

1　大学生活における友人関係とは何か。

2　実社会において、大学卒者と高卒者との能力の差異について。

3　いわゆる受験地獄について。

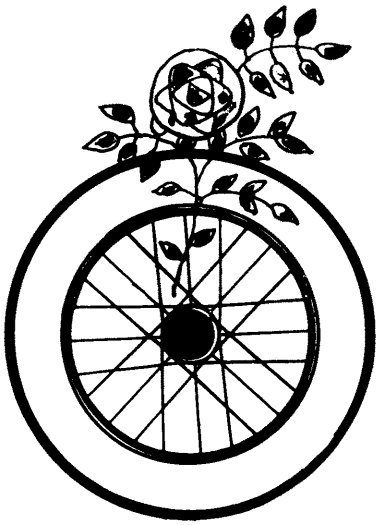
4　遊びについて。

(4)　懇親会・教職員学生の懇談の夕（第4日目）

野外講義のあと、ひと風呂浴びて夕刻から懇親会をはじめた。百人あまりが、大広間（大研修室）に集り、テーブルを囲んで、飲みかつ食べながら語り合った。やがて各大学毎に隠し芸を披露するという事になり、教官も事務官も学生も即席の「隠し芸」を精一杯にやった。演じる者も観る者も心が溶けあうひとときであった。懇親会は、本共同授業においては、メインのプログラムとはいえない。しかし、共同授業の全プログラムに「味付け」をするという意味で不可決の「部品」であることは確かだ。懇親会は、プログラムのこの部分に挿入されるときもっとも効果的なようである。

(5) 全体討議（最終日）

参加した教職員、学生を8名前後のグループに分け、「今回の合宿共同授業で何を学び、何を感じたか」というテーマで15分間程バズ集会を行い、ついで各グループでの話し合いの内容を全体に報告してもらい、全体協議を行った。この話し合いを通じて出された内容はほぼ次節に掲げる感想や意見のなかに具体的に示されているので詳細は省くことにする。



3．第二回共同授業の評価と反省

(1) アンケート調査の集計から

安 藤 延 男 （九州大学）

前回と同じように、今度も最終日の全体討議のあとで、アンケートを実施した。ここではアンケートの質問項目1から5までの5項目について、大学別・男女別に単純集計を行った。回答者数は84名（男子61名、女子23名）である。なお百分率（%）は、各大学別には算出せず、合計ならびに総計についてのみ算出することにした。なお、アンケート用紙見本は、第一回報告書に掲げてある。

表1から明らかなように、参加者の75%が「自分からすすんで参加した」と答えており、ついで19%が「友人にすすめられて…」と回答している。また「自分からすすんで…」と答えたものは男女それぞれ、74%と78%であり、両者の間には顕著な差は認められなかった。「参加の自発性」がかくも高いということこそは、今回の如き合宿授業などのグループワークを成功させるうえで、きわめて望ましいことであると言えよう。

次に表2のデータを見よう。「参加前の期待度」は、(1)「非常に期待」 2%、(2)「かなり期待」31%、(3)「ある程度期待」55%であり、第一回目のときがそれぞれ18%、33%、41%であったのに比べると、やや期待が低いように思われる。企画した側としては、前回の参加者のクチコミなどで、宣伝がゆきとどき、今回はこの「参加前の期待」が異常に高いのではないかと予想していたところであるが、アンケートの結果はむしろ逆の傾向を示している。なお、男女間に分布の差が若干みとめられる。

さて、「共同授業終了時における満足度」はどうであろうか。表3によれば、(1)「非常に満足」37%、(2)「かなり満足」57%となっており、(3)「ややもしくは全く不満」と答えたものは、わずかに6%にすぎなかった。これを前回と比べると、それぞれ32%、60%、8%となっており、従って今回も前回とほぼ同じくらいの満足度を味うことかできたと考える。

開催に適当な時期としては、91%が(1)「7月10日すぎ」（今回の開催時期に相当）と答えており、前回のアンケートへの回答が、著るしく分散していたのと対照的である。「7月10日過ぎ」という時期は、今後この種のプログラムの企画に当って採用されることとなろう。

最後に共同授業の期間の長さについての希望をみてみよう。「5日間(今回の期期間の長さ)」と答えたものは67%で、参加者のほぼ三分の二が今回の期間を適当とみとめている。第一回共同授業の期間（4日間）については、参加者の37%しか「適当」と答えなかったことを考えると、今回の日程は適切で

あったと言える。ただ、教官・事務官の間では、5日間は長過ぎるとする意見も多く、この点は今後の共同授業運営方法などとも合せて、検討を要するところであろう。

以上の集計結果を総合すると、今回の共同授業は、前回の企画に対する評価・反省を生かしたものとなっており、参加学生にとって極めて高い満足をもたらしていると言える。

ところでこうしたプログラムの評価のもう一つの側面は「生産性」（目標達成）に関するものである。これについては、今回もまた組織的な分析を行ないえないのであるが、次に掲げる自由作文（「友人宛の手紙形式でもよい」という教示により、アンケート用紙の裏面に感想を書くように求めた）の内容から、多くの肯定的な示唆を与えられるに違いない。これらによると、(1)共同授業における知的学習の成果にふれるもの(2)知的好奇心が刺激されたと述懐するもの(3)対人的接触を通じての自己ならびに他者の発見（もしくは再発見）を喜ぶもの(4)とくに教官・事務官との接触と親近感の増大をよろこぶものなど、参加者が共同授業の成果としてあげる内容はきわめて多岐にわたっている。われわれ企画者の側も、共同授業には「固有のテーマ」があり、それをめぐる「授業」がその中心であることを認めつつも、他方では「多目的的」なものであってよく、またプログラムは、そうした参加者の複合ニードに応えるよう企画されるべきだと考えている。

ともあれ、84名の参加学生全員の感想文のなかから、男女ほぼ同数で合計17名のものを無作為に抽出して掲載する。

表1：参加の動機

【質問1．この共同授業に参加することに決めたきっかけは何ですか。】

		(1) 自分から すすんで	(2) 友人に すすめられて	(3) 大学に すすめられて	(4) その他	計
九　大	男	16	1			17
	女	3	2			5
佐　大	男	3	2	1		6
	女	7	1			8
長　大	男	5	1	1	1	8
	女					
熊　大	男	4	4			8
	女	1	1	1		3
鹿　大	男	12	1			13
	女	1				1
琉　大	男	5	3		1	9
	女	6				6
合　計	男	45(73.8%)	12(19.7%)	2 (3.3%)	2 (3.3%)	61
	女	18(78.3%)	4 (17.4%)	1 (4.3%)		23
総　計 (%)		63(75.0%)	16(19.0%)	3(3.6%)	2 (2.4%)	84

表２：参加前の期待度

【質問２．この共同授業にどの程度期待していましたか。】

		(1) 非常に期待	(2) かなり期待	(3) ある程度期待	(4) あまり期待していなかった	計
九　大	男	3	6	8		17
	女	1	1	3		5
佐　大	男		1	5		6
	女	2		6		8
長　大	男		2	4	2	8
	女					
熊　大	男		3	5		8
	女			3		3
鹿　大	男		10	3		13
	女	1				1
琉　大	男	2	2	5		9
	女	1	1	4		6
計	男	5 (8.2%)	24 (39.3%)	30 (49.2%)	2 (3.3%)	61
	女	5 (21,7%)	2 (8.7%)	16 (69.6%)		23
合　計 (%)		10 (11.9%)	26 (31.0%)	46 (54.8%)	2 (2.4%)	84

表３：共同授業終了時における満足度

【質問3．この共同授業を終ろうとしている今、あなたはどの程度満足していますか。

		(1) 非常に満足	(2) かなり満足	(3) やや不満	(4) 全く不満足	計
九　大	男	12	4	1		17
	女	3	2			5
佐　大	男	2	4			6
	女	1	7			8
長　大	男	1	7			8
	女					
熊　大	男	4	4			8
	女		3			3
鹿　大	男	4	7	2		13
	女	1				1
琉　大	男	1	6	2		9
	女	2	4			6
計	男	24 (39.3%)	32 (52.5%)	5 (8.2%)		61
	女	7 (30.4%)	16 (69.6%)			23
合　計 (%)		31 (36.9%)	48 (57.1%)	5 (6.0%)		84

表4：開催時期についての希望

【質問4．この共同授業の開催に適当な時期について意見を述べて下さい。】

		(1) 10月初め	(2) 7月10日すぎ	(3) 10月中旬	(4) 12月下旬	(5) その他	(6) 回答なしもしくは2以上	計
九大	男		16				1	17
	女		5					5
佐大	男		6					6
	女		8					8
長大	男	1	7					8
	女							
熊本	男		8					8
	女		3					3
鹿大	男	1	11	1				13
	女		1					1
琉大	男	1	6	1		1		9
	女		5	1				6
計	男	3 (4.9%)	54(88.5%)	2 (3.3%)		1 (1.6%)	1 (1.6%)	61
	女		22(95.7%)	1 (4.3%)				23
合計 (%)		3 (3.6%)	76(90.5%)	3 (3.6%)		1 (1.2%)	1 (1.2%)	84

表5：日程（期間）についての希望

【質問5．日程（期間）は今回は5日間でしたが、一般に何日くらいが適当と思いますか。】

		(1) 3日間	(2) 4日間	(3) 5日間	(4) その他	計
九大	男			7	10	17
	女			5		5
佐大	男			6		6
	女			6	2	8
長大	男		1	4	3	8
	女					
熊大	男			5	3	8
	女		1	2		3
鹿大	男		1	9	3	13
	女				1	1
琉大	男			7	2	9
	女		1	5		6
計	男		2 (3.3%)	38(62.3%)	21(34.4%)	61
	女		2 (8.7%)	18(78.3%)	3 (13.0%)	23
合計 (%)			4 (4.8%)	56(66.7%)	24(28.6%)	84

(2) アンケートの自由作文から

①〔**琉大・理工・男子**〕(19歳、①自分から進んで　②かなり期待　③かなり満足)

A君こんにちは！

とにかくつかれました。そして夜の短い事に気づきました。先生方もつかれてる様子で、少々可哀そうな感じでした。しかし、あの連日連夜のコンパは最高でしたね。

講義の内容は文句のつけようがなくおもしろかったけれど、少々長い時間の中でついつい前夜のつかれが出てしまい、ペンを落して、ねむりこけることもありました。多分皆も、そうじゃないかナ？でもやっぱり人間っていうのはいいですね。いや若いって事がいいのかもしれない。み～んな見ず知らずの人達だったのに、日、一日と心が通い合うようになり、終りごろにはだれでもかれでも「オッス！」と声をかけられるようになり、楽しい事で一杯でした。

自由討議には、お互の大学のうちわの話をしてみたけれど、改めて今まで知らない事が、多すぎるのに気づきました。

僕はいつも冗談ばかり言っていましたが、それでも真剣に聴いてくれると、ついわれながらうれしくなり調子に乗って話しをしたものでした。そんなこんなの毎日をアッという間に終えてしまうと、「もう、別れか」等と、時のたつのの速さを痛切に感じています。

今、私が、一番心に残っているのは、皆で肩をくみ歌い合い、そしてバカさわぎをして、おどりを覚え、その中で、ひとりひとりを「ああこんな人もいる。」と何度も、思った事です。

これから先も、もうこのようなチャンスはないかもしれないけれど今出来た新しい友人をいつまでも心にとめておきながら生きてゆきたいものです。

それでは、お元気で、さよなら。

②〔**琉大・法文・女子**〕(20歳、①自分から進んで　②ある程度期待　③非常に満足)

「九州国立大学間共同授業」なんてむずかしそうな名前だったけど、何のことはありません。九州の大学の学生が集まっての親ぼく会でした。

朝8時半からの講義、そして夜その一日の講義が終わっての教官たちを交えての自由討議

私にとって、教官とこんなに『腹をわって』話しあえたのは、本当に初めての経験でした。いろいろな大学からきた人達は10人10色、人それぞれ異なる環境の中で育ち、考え方も違う。それぞれが持つ悩みや苦しみが、話しあっているうちに自然に口からでてくる。そんなふんいきの中で、時の経つ

のを忘れる思いでした。

そして、そんな中で感じたのは、それぞれがいかにして自分の生活をより一層楽しいものにし、又どんなふうにして自分をもっとみがこうとしているかという事でした。自分の日常生活とくに学生生活の中で、真剣にとりくんでいるんだということでした。そして、私自身の人間的な甘さに気がつきました。

もうひとつは、本土の人達が沖縄の事に興味や関心をもってくれていることを知り、すごくうれしいと思いました。今回は野外授業の際に激しい雨に降られるというアクシデントがありましたが、「それもみないい経験になったね。」なんて、みんなで話したものです。とにかく、いろんな人と知り合い、語りあって自分をみがいていくことの大切さを、今しみじみと感じています。

本当に楽しくて、あっというまにすぎさった5日間でした。

③**〔鹿大・医・男子〕**（18歳、①自分から進んで　②かなり期待　③かなり満足）

忙しく勉強に追いまわされた高校時代とは、うって変わって、毎日が、土曜日のような大学生活。僕は、このあまりにも充実感のない生活に、少なからずいや気がさしていました。そこへ、九州地区の大学生が一堂に集っての合宿があると聞き、一番に申し込みました。僕は何かを、そう、日頃充ち足りない我が心を満たしてくれるものを、求めていたのでしょう。

今、この合宿を終わるにつき、つくづくと思うことは、いかに、自分が意地の悪い、利己的な人間であったかと言うことです。常に、医学部というプライドを持ち、他人を一段高い所から見下げ、自分の気にそぐわないことは、他人の気持ちも考えずに、まるっきりやろうとはしない。これからも、無意識のうちに、こんな心を持ち続けるでしょうが、ただ今は、自分が、どんな人間かということがわかっただけで、満足です。そして、自分という人間を一歩ずつ成長させていく手だてが与えられたと思います。

人生は、堂々と、そして、素直に、明るく生きて行くべきものなのでしょう。自分には、まだ、恋愛の経験はありません。それは、自分が素直でなかったからなのです。「本当の素直さとは、何か」ということが今、わかるような気がします。とにかく、すべてに素直になろうと思います。

最後に、開催にあたり、尽力下さった方々へ、感謝をいたします。

④**〔鹿大・教育・男子〕**（19歳、①自分から進んで　②かなり期待　③非常に満足）

私は今、この九重の合同研修所での九州国立六大学の合同講義の日程を終わろうとしています。

大学入学以来、こんな充実した日々を過ごしたことはなかったので満足でいっぱいです。この充実

した、この満足した日々をあなたにもわかってもらえたら、幸いです。

まず、なぜこの合宿に参加したかという動機からお話しましょう。四月以来、何をするにも、何かぼんやりとした迷いがあり、その為に行動しても失敗につながることが多く、いつも悩んでいました。これじゃ、いけない、何でも身体ごとぶつかってやろうと、心の内で決めた矢先に、この合同講義のことを知ったのです。ある意味ではこの合同講義は、私の性格を変えてくれたのかもしれません。それから、わずかの経費で、旅行できるということと、2単位ということにも、少しわ魅力があったのかもしれません。

第一日目から、私の部屋では、いろいろな会話がかわされ、わずかながらも、その人の雰囲気をつかみとることができていました。顔も名も、知らない人が、ある瞬間に、友達になれるということの素晴しさも知りました。

講義にはいる前に、九大の奥田教養部長が言われた「講義の内容は全部忘れてよろしい。ただ、できるだけ多くの友達をつくってください」という言葉を、忠実に守ったのです。

教官の方々と、何の壁もなしに、語りあえたことは、大きな収穫でした。いつもは、自分の大学で、講義の時間だけのつきあいですが、寝食を共にし、酒をくみかわしつつ、人生についての討論ができたのです。「教授」と聞くと何か、かたぐるしく、私達学生の手のとどかない考えをおもちの人だと、思い込んでいましたが、ここに来て、そのイメージは、ある程度変わりました。

良かったこと、満足したことを、1つ1つあげていくとこのように数限りなくありますが、とにかく、この5日間は、私の青春の素晴しいそして、一生忘れることのできない日々であったということは確かです。

もし、この合同講義に、もう一度参加を許してもらえたら、必ず参加します。あなたも、是非参加してこんな満足感を経験してください。

⑤〔**鹿大・水産・男子**〕（19歳、①自分から進んで　②かなり期待　③非常に満足）

共同合宿授業に参加してよかったと思っています。期間は4泊5日で、あっというまに過ぎてしまい、もうすこしここにいたいなあという気持ちです。

共同授業に参加しておられる先生方の講義講演がとても熱心でありまた情熱的ですので、それがわたしの心にも伝わってくるようで、普段の大学の講義といくぶん違ったこの授業がとてもすばらしいものに思えました。そして講義のすまれた先生も、他の先生の講義を聴いて、質問をなさる様子には、とても深く感動し、人の話を聞くことがどんなに大事なことであるか、かつ自分の無知を悟る一つの方法であるかを思いました。先生方と野外であるいはコンパで、山の家で、身近に自由討議をしてみて、大学内では味わえないものを得たような気がします。そして、コンパの後で安藤先生と池田さんと三人でロビーにて自由に話しました。もうひょっとしたら一生会えないかもしれない人間が、こう

していま、一回限りのこの時を話し合えたということが、有意義に思われてなりません。

これからも人と人との触れあいには、どんどん参加して、自分をその中に発見し、また友だちを知ることで、自分というものを見つめなおすよい機会にしようと思っています。さいごに心に残ったことばを書いてペンを置きます。「一期一会」「永遠は今」。

⑥〔**熊大・工・男子**〕（18歳、①友人にすすめられて　②ある程度期待　③かなり満足）

前略

ごきげんいかがですか。僕は今、九州地区大学間共同授業に参加し、九重に来ています。僕がこの共同授業に参加しようと思ったのは、各大学の教授の授業を聞こうと思ったこともありますが、それよりむしろ普通ほとんど接触がない他の大学の学生との交流が魅力であったからです。そして、実際に共同授業に参加してみて、得るものがきわめて多かったと思います。まず講義ですが、自分の大学では受けられないような講義が受けられたことです。先生も自分の大学での講義よりも、はりきっておられるように感じました。そして自由討議も僕たちよりずっと経験豊富な先生たちの話などがとってもためになりました。コンパで酒を飲んで浮かれている各教授を見ていると、大学で見る教授とはまるで別人のようでした。あの先生にもこんな一面があるんだなあと思い、どことなく親しみがわいてきました。

野外研修では前から見たいと思っていた地熱発電所を見学できたし、5日間の共同生活で同室したり、コンパでいっしょになった他大学の人たちとも、だいぶ親しくなりました。

支離滅裂の文章でしたが、こういった意味でこの合宿共同授業は僕にとって大変有意義なものでした。

もう時間だそうですからこれで終わります。草々

⑦〔**熊大・法文・男子**〕（20歳、①自分から進んで　②ある程度期待　③非常に満足）

感じたり、学んだりしたことは文字通り、数えきれないほどです。少しも、シラケずに、またへつらわずにそう言えると思います。またそれらは、はっきりと意識できているものもあればずっと後になって、困難に出会ったり、迷ったりするときに、自分が本当に信じきれるもの、最後に自分を支えてくれるものであるようにも思います。

この研修に参加する以前は、浪人生活の延長で、孤独癖とか、疑心暗鬼的な考えが、尾を引いて、明らかに、自分のからにこもっていたと思います。

ところが、ここへ来て、一日、二日と過ごしていくうちに、僕はみんなが自分と同じように、悩み、迷っていることを知り、（ある先生の言葉を用いますと）ほんのちょっと勇気をふるって「ドアを押し開けば」心が通じ合える、感情が流れ合う仲間なんだということを体験しました。

また先生にしても、「全く別な人種」という考えが強かったのが、自分達の延長線上にいる人という印象を強く受けました。僕らと同じように若い時代があり、退屈したり、怒ったりしながら過したということを。

つまり、そういった、人間として、一番大事なもの―信頼感をどんなことがあっても持ち続けることができるという確証を得たことが、この研修での僕の成果です。

⑧〔**長大・医・男子**〕（20歳、①友人にすすめられて　②ある程度期待　③かなり満足）

Kさんお元気ですか。梅雨も明け、暑い毎日が続いていることでしょう。九重は昼間でも、あまり暑くなくすごしやすいです。昨夜は六大学合同コンパで2時近くまで酒がなくなってもなおしつこく、歌を歌い、そして「ほんとに、ほんとに残念やあ～！」といいつつもう二度と会えぬかもしれぬ友との別離を惜しみ、ベランダで、友の歌う『惜別の歌』に感動しながら、夜が更けるのを忘れました。楽しいなあと思いながらも、明日になれば、それぞれの大学に散っていくのだと思うと、1分、1秒がほんとに惜しいという感慨で胸がいっぱいになる思いです。はるばる琉球からやってきた友とわずかばかりの酒を分けあって飲んだそのうまさは、忘れられないだろう。

夜、研修所の外に出ると星がとても美くしく、そして、たくさんあるのにおどろきました。昨日の午後牧の戸峠までガタガタした道を息を切らせて、歩いていき、そこからの眺めも、またたいへんよかったです。久住山、三俣山などが、すぐ間近にそびえていて、とてもすずしい風が吹いていました。

私が過してきた、九大山の家は、あまり上等な建物でなくまさに山小屋という感じでした。宿泊所の近くには、九電の八丁原地熱発電所があるだけで、あとはほとんど何もありません。1キロほど下ったところに筋湯という温泉があるのですが、何とそこにはお年寄の入浴客の姿ばかりでした。

講義は、おもしろいと思うのは少なかったように思います。なんせ、狭まいところなので、足が痛いとか、腰が痛いとか大変でした。野外研修で、一目山や、湧蓋山などにいきましたが、途中で雨がふってきて、走って引返していると牧場の赤牛くんがドドッと走ってきました。こんなのと取組みあっても負けるのは必定と、すばやく赤牛くんに道をゆずりました。とにかくパンツまでづぶぬれでした。

それから、ここはいつも温泉がわいていて朝風呂だ、昼風呂だ、夜風呂だ、深夜風呂だと、いつでもはいりほうだいというすばらしいことこのうえありませんでした。

九重に集まった人たちとはこれでもう会うことがないだろうけれども、ここでの生活というのはが

いしてたいまんな生活に陥りやすい大学時代の生活に、一つのすがすがしさを与えるものであるのじゃないかと思っています。

それじゃ、もうここらでやめます。

⑨〔**長大・工・男子**〕（18歳、①自分から進んで　②かなり期待　③かなり満足）

親愛なるT君！

やっと九重に行くことができました。そちらは、いかがですか？たぶんあつい日々を過していることでしょう。でもこちらは、すずしく、そしてたのしい五日間を過しました。君のすすめのとおり久住山に登りたかったのですが、天気が悪く一目山に登っただけでした。本当は、涌蓋山にも登る予定でしたが、途中、どしゃぶりになって全員びしょぬれになってもどってきました。でもこんなことよりもっと君に知らせたいことがあります。それは、ここでの講義についてです。出がけにも、君にいっていたけど、ここでの講義は、九州の国立大の教官がして下さるもので、多方面からの「自然と人間」についての講義でした。その中でも生物学から見た自然についての講義（伊藤教官、田川教官）で、いろいろなことを知りました。「今見ている自然は本当の自然ではない。」ということには、おどろきました。また。琉大の森教官の化学式ならびに構造の決定の講義で、研究者の苦労と、技術の進歩に感激しました。テストに出るような、化学式の決定なんて、序の序の序の口なんですね。

最後に、この合宿で一番感じたことを書いて終りにしましょう。それは、講義よりも、多くの人とふれあって自分がどんな人間なのか、改めて知ったことです。鹿大の人、九大の人、琉大の人、熊大の人、佐大の人、そして長大の人とふれあっていくうちに、自分は、あまりにも狭まい人間だなあと感じました。また学生だけでなく教官との学問ぬきの先輩としての会話、すばらしかった!!人と人とのふれあいがこんなに大事なのか、ここにきてハッキリとわかったような気がします。まだまだ書きたいけど、もう時間だからこれでやめます。

⑩〔**佐大・教育・女子**〕（18歳、①自分から進んで　②ある程度期待　③かなり満足）

Kさんお元気ですか。

私は、7月11日からの第2回九州地区国立大学合宿共同授業に参加し、今最終日の15日を迎えています。

私にとってこの5日間が何であったのかをお話ししたいと思います。

7月11日、12時45分に佐賀を出発し、九重共同研修所には5時頃に着きました。私はバスが大へんきらいで、また冷房バスであったため、到着地点につくすこし前は、すこし興奮ぎみであったことを反省しています。研修所のお部屋についた時は、各大学の人はもうすでに到着しており、みんなで自

己紹介をしあい、琉球大学の人の持参したあちらの名物を食べました。それから交歓夕食会があり、予想していた料理よりはるかにごちそうで、ビールなどもありました。それが終って8時半からさっそく第一回目の講義がありました。その講義は「社会的風土と人間」というテーマでおもに討義法について学びました。そこでバズ・セッションというものをやりました。それが10時に終わり、あとの1時間は自由時間でした。

琉大の人は一日早く10日にきたということで、船、鹿児島からバスという旅で、たいへんつかれたのではなかろうかと思いました。一日目は無事なんとか終わりました。

2日目の起床は7時ぐらいで、7時半から朝食、8時半から過密なスケジュールが始まりました。8時半～10時まで琉大の木崎先生によるスライドの講義があり、私も世界の国々をまわってみたいという気がしました。30分休憩して10時半～12時まで私の大学の東城先生による講義がありました。それから昼食をとって1時～2時半まで講義、2時半～3時半休憩、3時半～5時まで講義、5時～7時まで自由時間及び夕食、7時～8時半まで講義、8時半～10時まで自由討議がありました。自由討議では沖縄のこと、大学生活のこと、カリキュラムのこと、講義のこと、言語のことなどを話し合いました。それで、2日目を終えました。

3日目もだいたいこういうスケジュールでした。3日目の討議のときは昔の学生と今の学生の共通点や違いについて話し合いました。

4日目は野外授業で、私は楽しみにしていました。先生の「絶対晴れます」というおことばにもかかわらず、朝から雨がふり午前中は、講義をうけました。午後から晴れるようだったので野外に出ました。私は山が好きで久住に登ろうと思ってましたが、そういう時間がなく近くの一目山に登りました。植物の名をききながら、頂上に向かって登りました。頂上からのみはらしはとってもよかったです。それが5分ともたたないうちに霧にみまわれ、ぜんぜん視界がきかなくなったのです。山の天気は恐しいと感じました。それからまた別の山に登ろうとしていたら、途中で雨にあい、ずぶぬれになって帰ってきました。でも、こういう経験もよかったと思っています。私は途中でころんでどろんこになったので、帰りは走っておりました。そして夕食をとり、7時半からこの共同授業のクライマックスとも言うべき、コンパがありました。みんな、すごくのってとてもよかったです。

あんまり支離滅烈な文になってしまいましたが、この5日間は口にはいえないくらい、貴重な体験をしたと思います。

私はこの体験を一生忘れることができないと思います。

お会いして、もっとくわしくお話ししたいと思います。

それまで、お体をお大事になさって下さい。

⑪〔佐大・教育・女子〕（19歳、①自分から進んで②非常に期待③かなり満足）

お元気ですか。私は今、九重の山奥で水のせせらぎをききながら優雅に避暑などとしゃれこんでいます。下界はフライパンの上のように暑くて、みんな夏バテしている頃でしょうね。避暑だなんてきどっていいましたが、実際は講義がビッシリつまった九州国立大学共同研修で熱気ムンムンの中、しごかれて(？)いるのです。でも不思議なもので環境がかわると、あんなに苦手の自然科学の講義でさえもけっこうついていけるんですよ。スライドをみたり、くだけたお話なんてのもあるし、しかし何といってもメインは、野外授業でした。一目山から湧蓋山へとみんな意気揚々と出発したところ誰か山の神様にうらまれていたのでしょうか、まるで私たち一行のあとをおいかけるかのような雨と雷・風にふきとばされそうで必死でおりてきたんです。当然、上から下までグッショリぬれて下半身は泥だらけ、みるもあわれな格好になってしまいました。でもとってもよかったと思います。まあ雨で遭難というのは聞かないし、おまけにみんなの連帯感が高まったのですからね。

それからもう一つすごかったのは、コンパ。あんなに盛りあがったのは初めてです。次から次へとマイクをうばいあって芸を披露してくれるし、それがとっても上手なんでもっと私も頑張らなくっちゃ。こうしていろんな人といっしょに暮らしてみると、つくづく自分のちっぽけさがわかります。
でもみんな同じようにいろんなことを悩んでいるんですね。自分だけじゃないってこと、そしてちょっと見渡せば、いつでも、どこにでも力になってくれる友人たちが待っててくれるってことがわかったみたいです。若いってことはとってもすばらしい。みんな若さのありったけで力いっぱいぶつかっていこうとしているのが肌にしっかりやきつけられました。

この九重の雨あがりのさわやかな朝の光の中で、お便りをしています。ではごきげんよう。

⑫〔佐大・教育・女子〕（19歳、①自分から進んで②非常に期待③かなり満足）

こんにちは。

わたしは今、九重の九州国立大学研修所に居ます。今日は九州地区国立大学間共同合宿研修授業の最終日です。

4泊5日でいろいろな大学の人たちと寝食を共にしてきました。1日に7時間半の講義と2時間の討論と、かなりハードなスケジュールでしたけど、今、とてもここに来て良かったと思っています。きっと私の中に大きな収穫を与えてくれたでしょう。

私は元来、こんな催しが好きですから、キャンプ、登山には必ず参加してきました。今度も、最初は〝何でも吸収してやろう〟とずぼらなくせに思い立ってみたのです。九重というところは高1のク

ラスキャンプの思い出と感激の地であり、たいへんな魅力でありました。それに安価で、2単位もとれ、毎日あくせく間借生活に追われている私にとっては快適でした。

涼しいし、自然の声（ひぐらしの声・渓流のせせらぎ・風の音）が響いて自然児にもどれました。ワーオ！（遠吠え）まあ環境はさておいて、何よりの収獲は多くの人たちとつきあい、話しあい（次元の高い）のできたということです。

討論は今の教養においてやられますが、内容の充実がないし、人生、つまり自分の生き方や考え方についてとかいうつっこんだ話ができないのです。みんな消極的で張り合いがなく、つまらないものだと思っていましたが、ここに来たみなさんは、たいへん積極的な方ばかりで、つとめて話そう、心を開いて話しをしょうという態度が大いにあり、うれしく思いました。

真剣に生き方を捉え、取り組んでいこうとしておられるのです。（抽象的な言い方でひとりよがりに聞こえるかもしれませんが。）恋愛論についても友情についてもこだわりもなく話してくださいました。

友だちになろうと自己紹介をあちらこちらでしていることはしばしばありました。それが話し合いのfirst step ではないかと思います。

それから2日目には生きがいについて、私のように勝手気ままなのでなく、家の仕事をつぐために生きがいを見出せないという立場の話を聞き、考えるところがありました。

私が今の大学に来ているのはこれに私の生きがいを見出せそうに感じたからです。それにしても人にはそれぞれの立場があり、たとえば入試に失敗するようなことでそれが変更され、失望の中から新たな生きがい探しをせねばならない人たちがいるのでした。私は決　てノンポリであってはならないそして、自分はいかに恵まれているかと思い、責任を感じざるを得ま、ん。

（ここらで先生がせかしていてみじかくなりそうです、あと2分）

それから、みなさんの視野の広さにもおどろきました。うまく言えませんが、自分なりの意見を持っておられる方に出会いました。

私は考えのかたいちっぽけな人間だなと思うと、同時に生きた人間に触れたような複雑なきもちでした。

いろいろまだ言い足りませんが次便でくわしくお知らせします。今、この胸の興奮を少し冷やして自分のものにしてからまた思い出してみます。では、また。

⑬〔佐大・理工・男子〕（20歳、①自分から進んで　②ある程度期待　③かなり満足）

共同授業の始めに九大の教養部長が「おそらく講義のことはわすれてしまうだろう。」の言われたが、

そのとうりであった。今私の頭に残っていることは「そんな考え方、そんな研究があるのか？」ということぐらいであった。しかしこのようなことはもし共同授業に来ていなければ、わからなかったことで、やはりそれなりの成果はあったとおもう。それと4日目の野外学習のときに雨が降ってとっても残念であった。コンパにおいては歌あり、おどりありでとっても楽しくその時、多くの友が生れた。私は酒が飲めないのだが、しかしコンパではどのくらい飲んだかわからないほど多く飲み、すこし気分が悪かったが、円を作って歌っている間にどこかへいってしまった。コンパのときが共同授業期間中で一番楽しかった。みんなも同じ気持だとおもう。自由討義においては色々な事を話した。たとえば公害のこと、飛行機のこと、そこで感じたことは「みんな私が考えもしなかったことを考えているのだなあ」と感じ、とっても勉強になった。

⑭〔**九大・法・男子**〕（18歳、①自分から進んで　②非常に期待　③非常に満足）

T君元気かい。大学生活ももう3ヵ月半おわったね。君は東京の生活になれたかい。8月に君が帰省するのを楽しみにしているよ。

あのね、君も知ってのとおり僕は神経質で消極的で友だちがあまり多い方じゃないだろう？大学に入って教養部は全然知らない人ばかりでみんな数人づれでキャンパスをダベりながら歩いているだろう。気が弱い僕としては強い孤立感をもってたんだ。でも寮に入ってわりと話しあう友だちもできたし、クラスでもなんとかうまくやっているんだ。あの内気な僕がだぜ！ところで僕は今、九重に来ているんだ。高一のときみんなで登った久住山には登れなかったけど。今、九州地区の国立大の学生が四泊五日で共同研修所に集まって講義をうけているんだ。講義といっても大学の教室の講義とはだいぶ違っていて実質はとても楽しい合宿っていう感じ。昨晩なんかコンパで僕は不思議とリラックスしてビール、しょうちゅうをちょっと飲みすぎ。みんなで「なつかしのマンガ主題曲」の大合唱。酒のまわりもちょうどよく、とても素敵な学生生活の一つの思い出になりそうだ。この共同授業は九州の六大学（佐大、長大、熊大、鹿大、琉大、そして九大）が集まってやってるんだけどみんなすごい個性をもってるし、いろいろな地方の人と知りあえて話しているうちに自分をみつめなおすことができたみたいだ。それから意外だったのは先生方のこと。教養部じゃちょっと考えられないような先生方の一面にふれられたんだ。とくに教養部長の奥田先生、どんなにかこわい先生だろうと思っていたのに実際話してみると楽しくてとってもいい先生なんだ。君は大学の教養部長と話したことあるかい？やっぱり人間話しあってお互いその人のことを断片的にでも知ることができるんだね。そんな意味においてもこの共同授業は大成功だと思う。こういう企画が全国的に広がったら素敵だね。国立大だけじゃなく私立大の人たちとも話し合いたいな。友だちが確実にふえていく。もうあまり時間がないからきょうはこれくらいにするよ。8月3日だったっけ？

帰省したらすぐ電話しろよ。高校卒業して全然会ってないし、したい話もいっぱいだ。君の帰省をまってる。僕もこの夏休みそっちにいくつもりだ。他の東京にいる友だちにも会いたいな。

じゃあ、元気で。さようなら

いま、九州地区国立大学研修所にいるYより

7月15日

⑮〔**九大・理・男子**〕(20歳、①自分から進んで　②ある程度期待　③かなり満足)

私は、今九重の研修所で他大学の学生、教官と忘れがたい時を過ごしています。日頃は真剣に学問や社会問題、人生の問題など話し合う機会も精神的準備もないように思われる学生の生活は、実は上べをつくろい、あたりさわりなく友人関係を保とうとする安易な一面にすぎないことがわかりました。皆心の中では自分の全てをぶっつけて討論できる相手を求めているのです。学生の問題意識の低さをよく話題にしている私たちですが、表には出さないけれど、だれもが私たちと同じく悩み考えていると私は確信を持つにいたりました。

昨日はコンパを行ない、私にはめずらしく大声をはりあげ肩をだきあって歌いました。そのためでしょうか、それとも生まれて初めて4時近くまで起きていたせいでしょうか、声の調子が少し悪いようです。大学内では一部学生の運動により、そして授業のみの接触からゆがめられて私たちの心の中に組立てられた教官のイメージができていますが、これもコンパの大歓声とともに、霧のかかった夜の山々に消えてしまいました。世代の違いはあっても本質的には理解し合えるという思いを新たにしました。君はたぶんビックリすると思うがあの奥田先生が、私たちと肩を組み歌いまくったのです。九大教養部の全学生に見せたいと思うくらいです。沖縄の友達もできました。九州中に100人近くの友達ができたような気持ちです。

今年の夏休みはこんな楽しい思い出から始まりました。君も楽しい夏を過していることと思います。休み明けにはまたあの暑い下宿で夜半まで語り合いたいと思います。

⑯〔**九大・文・女子**〕(20歳、①自分から進んで　②非常に期待　③非常に満足)

感想

掲示板にはられた合宿の計画をみて、私はすぐに胸がおどった。

大学では確かに内容のある講義が聞けて十分満足している。友だちとも、できる範囲内では交流していて、刺激になっている。

しかし、私が大学に入学する前に感じていたのと比べてみると、勉強の面では、納得のいくものを与えられているし、私もそれを百パーセント活用し、実のりあるものにしたいとがんばっているのだが、友だちとふれあうという面では、十分でないように思う。

心はいつも開いているのだ。心はいつも求めているのだ。しかし、現実に、具体的に考えるとそのような場所も、そのような時間も、ないとはいえぬが十分でない。私は今まで不満を言いつづけるばかりよりもその条件の中で、その足場から一歩をふみだそうと私なりの努力をしてきたつもりだ。

しかし、この合宿の掲示には私に日々の学生生活には求められないもっと新しいもっと広いもっと自由な生活を与えてくれそうな予感があった。五日間、九州全土から集まった大学生と勉強ができ、共に食事をし、ふろに入り、語り、ふとんに入る事ができる。しかもいつも一段上にいて、尊敬はするけれども、また教えられる事が多くてありがたいとは思うけれども「共に」おなかの底から笑い合い語りあう機会に恵まれにくい教授とも生活できるなんてこんなすばらしい計画はないと思った。

参加した理由のもう一つは、私はもう秋から専門課程に進み、学習の分野がせばまるのでここで教養時代の一般科目のやりおさめをしようという気もあった。一つのこの大きなメインテーマ「現代の人と自然」について、こんなにも広い分野からの多面的なアプローチができるのは、この先、そうない事だろうと思ったし、このような多面的アプローチの構えを、私の今からの 研究にいかしていけるのではないかという期待もあったのである。

このようにこの合宿における私の大きな目的は勉強は勉強としてけじめをつけその中でこの場所でしか味わえないふれあいを大切にして、自分を広げていこうというものであった。合宿がおわった今私はふりかえってみる。すばらしかった。しかし日々あせりもあった。わりにゆったりと、甘くプロジェクトされた講義日程と講義へのとりくみ雰囲気のために学校でのそれよりも真剣さに欠けているのではないかという事である。しかし私はもっと大きな発見をした。この合宿での広い分野での多面的アプローチを「やりおさめ」と位置づける事のまちがいである。私は専門に入っても、決して専門だけではいけないのだ。常に視野を広げ常にどんな事からも知識を吸収する態度が必要なのだ。テレビを利用するもよし、公共施設を利用するもよし、講座を利用するもよし、とにかく広い全体に目をむけ常に気軽に、しかも心の底からの要求に動機づけられて学ぼうとする姿勢をもちつづける事が大切だという事に気づいたのである。その意味でこの合宿はよい機会であった。講義の事よりももっと心に残り私を真にゆさぶったのは人と人とのふれあいである。ああこんなにたくさんの人間がいて、それぞれがそれぞれの性格をもち、それぞれの考え方をし、それぞれの生活をしている。私は今まで学校で自分を一生けん命大切にはぐくんできていたが、この五日間のようにすなおな心で人を見ていただろうか。

その人自身をはだかの目で見る。そこにいろんな人間を発見する、そのいろんな人間は、確かにい

ろんな人間なのだが、共通して言える事は、みんなてれながらも模索しながらも、人を求めているという事である。

ここに人間というものがあるのだなあと思った。悩みながらも、やっぱり求めてる。決して一人でいる事を望んではいない。そして私もそうなのだ。

⑰〔**九大・薬・女子**〕(19歳、①自分から進んで　②かなり期待　③かなり満足)

毎日の単調な生活に、何かの刺激が欲しくて参加した共同授業が今終ろうとしています。四泊五日も一緒にすごすと新しい友達ができるのではないかな、とか、クラブの合宿みたいに考えて参加したんだけど、それ以上にすばらしい結果を得ました。

一番良かったのは、普段別世界の人のように疎遠に思っていた大学の先生方とお話しできたことです。

学内のビラで奥田先生は「保守的な弾圧者」だとかいうイメージがあったんですが、本当はとてもやさしくて理解がある方で、学生の事を考えていてくださっているんだなあ、と思いました。くわしい事は帰ってから話しますけど、奥田先生のよさがきっとわかると思います。

自由討議の時は、先生がたの意見がとても参考になりました。非常に新鮮で、いろんな見方があるんだと感心しました。仲間同志で話していると、どうしても１つの見方に流される事があるので、本当によかったと思います。自分がばかだと思いました。今のうちなら、私はばかです。と言っても将来に期待して、絶望的にはならずにすむでしょう。でも、若さに甘えてはいけないと、これは安藤先生とお話ししていて思いました。時間があるからと現在をむだにすごすと、将来などは存在しない。つまり、全く進歩しないと思いました。その他にも、他の先生方や、友達と、沖縄、公害、薬、などいろんな事を話しました。薬とか公害についてはサークルで話あったりするから、少しは意見も言えたけど、それでも、自分の考えが机上の空論にすぎないと思いました。琉球大学の人と沖縄の話をすると、その人たちが、自分の問題としてとらえていることがわかります。私達にはあの人たちのようには考えられないと思うけど、それにしても自分の甘さと無知を思いしらされました。

こんな風に書くと、固くて、まじめ一方の合宿のように思ってるかもしれませんね。ところが最終日のコンパ、あれを見れば、絶対考えがかわります。いろんな歌を肩をくんで歌ったり、踊ったり、先生方が酔っぱらって、ソロをやるのだとへたな歌を歌われるのを聞いたりしてとても楽しかった。あんなにのったコンパは始めてでした。私は知っているように、雰囲気にはあまりのる方じゃなくてコンパもしらけていることが多いのに、すばらしく陽気にさわいでしまいました。新しい自分を見つ

けた気がします。

もう時間がないので書きたい事はたくさんあるのにやめなければなりません。

本当にこの共同授業はためになったし、楽しかったと思います。参加してよかったと思います。次の第3回の共同授業に参加できないのは残念です。

参加学生名簿

〔計84名　注）○印は学生世話人〕

九州大学（22名）

朝隈健介
安達洋祐
荒牧英治
有田親史
○植田　登
蔵本晴之
古賀章彦
佐藤　誠
庄島幸男
次原英文
中島勝秀
橋本吉秀
浜武文雄
福田幸弘
藤原勇二
山下　悟
和田郁夫
池田洋美
仮屋直美
黒田稔子
河内山晶子
近藤摂子

佐賀大学（14名）

小野雅勝
川西英二
○坂本裕之
蘭　直司
高柳清美
宮原達也
藤井典子
井形亮子
内野千枝子
桑野美恵子
小宮尚子
中野幹子
矢田恵子
山崎文子

長崎大学（8名）

宇野栄一
大井手淳也
梶原修平
○久我利孝
田中康弘
西谷正嘉
本山俊一郎
松田真人

熊本大学（11名）

石橋尚登
内田正之
角田　浩
川原邦彦
黒田　寿
○反後　茂
津村徳光
松野信也
田辺美雪
徳勢三希子
溝口紀代子

鹿児島大学(14名)

石川重久
梅津敏夫
下小野田　寛
中山富士男
成尾鉄朗
丹羽清志
浜田俊一
平野　靖
藤田芳昭
堀之内健郎
増岡一宏
山下修司
○渡辺哲彦
迫　加代子

琉球大学（15名）

泉澤康晴
大久保　勉
城間盛正
黒木正治
具志堅忠昭
出口和隆
仲村　剛
○八村智明
比嘉秀吉
池村加代子
石原ひろみ
浦崎弘美
大嶺智子
神山直子
名城順子